

史談

2020 (R2)

4. 21

■ 史談会研修会が開催されました

令和元年度の研修会を下記のように開催しました。

36名の会員、非会員の皆様にお集まりいただき、会場が手狭になるほど盛況な会でした。

内容は9月から開催した自分史講座の報告と参加者が感想を述べました。また、昨年度が置賜三十三観音ご開帳年だったことから、町内二ヶ寺のご住職をお招きしてご講演いただきました。

1. 日時 令和元年2月15日(土)
研修会：午後1時30分～3時15分
懇親会：午後3時30分～5時

2. 会場 荒砥地区コミュニティセンター

3. 内容

- ① 自分史講座の報告(渋谷敏巳副会長)



- ② 白鷹町の置賜三十三観音

講師 山口宥俊さん(七番札所高玉観音)

菊地豊宗さん(二十九番札所松岡観音)

進行 高橋克範さん



■ 総会を延期します

毎年、5月下旬頃に開催している総会ですが、新型コロナウイルスの蔓延を避けるために今年の総会は延期とすることを決定いたしました。幸いにも現在のところ、白鷹町で罹患者は出ておりませんが、日頃の注意が肝要です。開催の目処が立ち次第ご連絡いたします。

役員改選の年になりますが、総会開催までは去年度の体制のままとします。役員の皆様、書面での通知になりますが、どうぞよろしくお願いいたします。

■ 敬文舎会報に史談会の紹介文が掲載されました

歴史、美術関連の本を出版している敬文舎の会報「舎人倶楽部」に史談会の紹介文が掲載されました。

舎人倶楽部の紙面には新刊や博物館の紹介に加え、地域の歴史研究グループや団体を紹介するスペースがあり、山形県では最上の歴史研究会が掲載されたことがあると編集担当者から伺いました。

3月末に掲載依頼の電話をいただき、事務局の石井が主に『史談』50周年記念号の文章を参考にして書きました。今回、舎人倶楽部も同封したのでご覧ください。最終ページです。

■ 『史談』発行年です

総会がないのでお知らせが続きます。

さて、今年は会誌『史談』の発行年です。外での調査もままならない現状ですが、少しゆったりした時間が流れているこんな時こそ、家で腰を据えて、取り組んでみるのはいかがでしょうか？

日ごろ気になって調べたこと、昭和の記憶など、さまざまな分野での皆様の原稿をお待ちしております。

原稿締め切り：12月頃を予定します。

■ 100年前は「スペイン風邪」

このたびの新型コロナウイルス感染症（COVID19）流行について、さまざまなものを見ていると、「スペイン風邪」の流行が同じようなものとして取り上げられていることに気がつきます。

インターネットで調べると、スペイン風邪とは、「鳥インフルエンザの一種と考えられるスペイン風邪は、1918年、アメリカ合衆国の兵士の間で流行しはじめ、人類が遭遇した最初のインフルエンザの大流行（パンデミック）となり、感染者は6億人、死者は最終的には4000万人から5000万人におよんだ。当時の世界人口は12億人程度と推定されるため、全人類の半数もの人びとがスペイン風邪に感染したことになる

<https://ja.wikipedia.org/wiki/感染症の歴史>）」と説明されています。

また、このインフルエンザは、世界的には3波に渡って流行し、日本では1919年の春から始まる第3波がもっとも被害が大きかったとも説明されています。

この第3波の収束が大正9（1920）年ということもあり、ちょうど100年後の現在流行している新型コロナウイルス感染症に関連して持ち出される要因の1つとなっているようです。

私の祖父の守谷要助は小国町の勤務地で大正8（1918）年5月21日になくなっています。亡父に聞いたところでは「スペイン風邪」だったということですから、歴史的な感染症の第3波の犠牲者ということになります。

今年の4月9日付けの「福島民報」では、「スペイン風邪は、今ならH1N1型インフルエンザだったと分かっているが、当時はウイルスを発見できる電子顕微鏡はなかった。原因がウイルスと分からないまま日本政府が実施した予防接種は無駄だった。ワクチンも特効薬もないのは今のわれわれと同じだ。当時の対処法も今とそっくりだ。内務省は「はやりかぜ」にかからないためには（1）病人に近づくな（2）人の

集まる所には入るな（3）マスクをつけよ—などと呼び掛けた（<https://www.minpo.jp/news/moredetail/2020040974513>）」と説明しています。

けれども、福島民報の記事にも書いたあったことですが、今回は病原体もわかっています。また医療技術や体制も当時とは比較にならないほど進んでいます。だから、「感染症との戦いでは対策を社会全体で積み重ねることが多くの命を救う」という文で記事は結ばれています。

スペイン風邪から100年後の現在、その時は情報伝達が遙かに高度になった中で、この感染症について「正しく恐れる」とか「正當にこわがる」ということが呼びかけられています。しかし、現在、さまざまな情報の渦の中に私たちはさらされています。なかにはまったく根拠のない、困ったものも少なくありません。ですから「正しく恐れる」とか「正當にこわがる」のためには情報の質を見抜く目がとても大切になってきているなど思うのですが、それもとて難しいことです。まずは自分自身ができることで「手洗い」「密集を避ける」などを心がけ、むやみに怖がらない、そういつて油断をしない毎日を過ごすしかないと思うのです。（守谷）

■ 今後のことなど

史談会の集まりを開くことはしばらくできそうもありません。その他の学習の機会も「古文書研究会」もしばらくお休みになるなど、殆どないことになっています。

江口儀雄さんから届いた古文書研究会お休みの文書には、明治12（1879）年8月3日に建てられた米沢市赤芝の「虎列刺菩薩」の写真が添えられていました。これは全国的なコレラ流行の時に亡くなった人たちの供養塔のようです。

また、浅立の大念仏塔には流行病の死者の供養として建てたという伝承が伝わっています。

この機会にそういうものを集めて発信するのも史談会の役割かなとも考えています。みなさん、情報をおよせください。（守谷）